

令和5年度 県立家島高等学校 学校評価

分野 (I 学校全体・組織・運営 II 学習指導 III 生徒指導 IV 進路指導 V 地域連携・PTA)
 評価 (A よくできた B できた C あまりできなかった D できなかった)

分野	分野	評価項目・達成目標	成果指標(具体的な達成目標)	評価	成果・課題	改善策	学校関係者評価
総務	I	年間行事の精選と生徒の主体性を育む行事の充実、地域の教育資源の有効活用を図り、魅力ある学校づくりに努める。	行事検討委員会と連携し、学校行事の改善と充実を図り、生徒の満足度を高める。	A	計画していた行事については、滞りなく実施できた。	生徒のニーズを把握し、教育活動上、より有益な学校行事の実施・改善を検討する。	
	I, V	防災避難訓練等を実施し、命を守る意志と技術を身に付け、地域に根差した学校としての防災意識を向上させる。	防災避難訓練を実施し、自他の生命を尊重する態度と主体的に行動する力を身に付けさせる。また、地域の避難所としての役割を意識させる。	A	小・中・高・地域合同避難訓練として、炊き出し訓練を再開し、新型コロナウイルス感染症流行前の形式に近づけて実施できた。自衛隊・消防署の方と協力して様々な活動を行うことができた。	各団体にも計画の段階から参加してもらい、実施内容のさらなる充実を図る。	
	V	地域の関係機関をはじめ、PTA・同窓会・地域連携支援協議会等と連携して、地域に根差した学校づくりに推進する。	地域と連携した活動の展開とその周知に努めるとともに、地域行事への生徒・教職員・保護者の積極的参加を促す。	B	避難訓練や文化祭などの学校行事には、多くの地域の方に参加いただいた。しかし、地域行事の参加については、十分な参加者を集めることができなかった。	周知を徹底し、積極的参加を促す手立てをとりたい。	
教務	I	生徒の実情や希望、また本校の特色が全面に出るような教育課程を設定し、生徒一人ひとりが各自の能力を十分に伸ばす。	授業担当者等と定期的に協議を行う。また、必要に応じて教育課程委員会を開く。	A	日常的に授業担当者等と協議を重ねながら、特色ある教育課程を実施することができた。また、必要に応じて教育課程委員会を開き、現行の教育課程の見直し・改善を行うことができた。	教科担当と担任の連携や教務部の定期的な協議体制を確立し、時代のニーズ、生徒のニーズに即した教育課程を設定する。	
	I	少人数や習熟別などのきめ細かい学習指導を行い、基礎的な学習内容の定着に努める。	授業担当者等と定期的に協議を行う。また、必要に応じて教育課程委員会を設ける。学期ごとの成績不振科目補習者数減少を目指す。	B	少人数授業や習熟別授業など、きめ細かい学習指導を行った。また、調査前日補習や成績不振者等への個別支援を行うことで、成績不振科目保有者数の減少が見られた。	個に応じたきめ細かい教育活動を展開している。教科担当と担任の連携や教務部の定期的な協議体制を確立していく。	
	II	進学、就職それぞれの進路目標に応じた「確かな学力」を身に付けさせるために、類型ごとに授業内容を見直す。	学期ごとの成績優秀者を増やすとともに、成績不振科目補習者数の減少を目指す。	C	少人数授業や習熟別授業などのきめ細かい学習指導を行い、成績不振科目を有する生徒は減った。一方で、成績優秀者数を伸ばすことはできなかった。	学年・教科と連携し、家庭学習の定着や時間の確保を図るとともに、学習意欲向上に努める。	
	II	一人一台端末やICT機器を活用し、授業内容の充実や学習内容の効率化を図る。	公開授業や研究授業を通して指導方法について研鑽し、授業改善や指導力向上に向けて取り組む。	A	授業時だけでなく、課題の提出・活習、学習状況の把握など、多岐にわたってICTを活用することが増えた。また、ICT活用をテーマにした公開授業週間を2度実施し、授業改善や指導力向上に取り組んだ。	校内研修を実施し、多くの教員が効果的なICT活用ができるようにする。	
	II, IV	進路指導部と連携しながら、長期休業中の補習および模擬試験を計画的に実施する。	大学進学者を中心に参加を促す。	B	夏季休業中に補習を行い、基礎・基本の定着だけでなく発展的な内容にも触れることができた。また、2・3学年については模擬試験を実施した。	進路選択に相応しい学力の定着と進路意識の醸成に向けた進路LHRや行事の充実を図る。	
生徒指導	I	いじめ認知を強化し、生活環境の正常化を図る。	年間11回の「生活実態調査」を実施するとともに、担任と協力して生活環境や人間関係を整える。また、教員間で生徒情報を積極的に共有する。	A	生活実態調査では生徒の現状を理解し、教師間で共有、生徒への支援を協議して実践することができた。	継続して実施し、生徒から学校生活に関することなどを素直に表現することができる環境を作る。	
	I, III	交通安全に係る規範意識を高める指導をする。	年間1回以上の「交通安全講話」を実施する。	C	交通安全教室や日々の教員からの注意喚起を通して島内の通学マナーの向上に努めたが、当事者意識が低く、歩きスマホ、徒歩、自転車での並列が見られた。	交通マナーなどに関して当事者意識を持たせる。	
	I, IV	「挨拶、返事、報告、連絡、相談、お礼、お詫び」を実践する。	校内掲示物と指導頻度を増やす取り組みを行い、習慣化させることを目指す。生徒の委員会活動での掲示物作成。	B	港、校門での挨拶運動を続けることで、校内でも挨拶をする習慣が形成された。生徒会では目安箱を設置し、生徒の声を聞き、生徒会活動などに対して参考にするような仕組みを作ることができた。	各生徒が自分たちが家島高校の一員であるという認識を持たせ、活動に自発的に参加するような意識を持たせる。	
	I, III	地域行事やボランティア活動に積極的に参加する。	募金活動と地域清掃を合わせて5回以上実施し、「奉仕意欲」「自己有用感」「自尊感情」「ふるさと意識」等の高揚を図り、地域を担うリーダーシップを養成する。	B	各学年末考査後の島内清掃と募金活動を実施した。生徒からは島内の小学生との放課後を使った交流活動が提案され、自分たちの立場を理解した上での行動を考えられるようになってきた。	教員に言われて行うボランティア活動ではなく、生徒が自ら考え、発案できるような環境を作る。	
進路指導	I, IV	3学年全員の希望進路を実現する。	進路未決定者を0人にする。	A	各生徒の実情に応じた進路指導を徹底し、12月末時点で進路未決定者0を昨年度と同様に達成することができた。	今年度得られた知見及び人脈を来年度の進路指導に活用し、継続した進路実現を達成できるように努める。	
	I, IV	スタディサプリや模擬試験を積極的に活用して生徒の学習レベルを掌握し、生徒一人ひとりの実情に応じた進路指導を展開する。	進路行事は年間3回以上、進路面談は定期的に実施し、2年生3学期頃には進路希望を決定できるようにする。	B	業者と連携した進路行事を例年通り実施できた。	学年と進路指導部が連携した進路LHRを実施するなど、学年と進路指導部が一体となって情報共有を図っている。	
	I, IV	生徒の主体的な進路選択とその実現を目指す。長期的な視点に立った進路指導計画を確立して実行する。	トキメキ仕事体験の活用やインターンシップ、オープンキャンパスの参加などを促し、1・2学年の間から進路選択に向けて準備をおこなう。	A	1・2年生全員がトキメキ仕事体験をおこない、昨年度実施できなかったインターンシップも各生徒の希望に沿って、実施することができた。	自発的なオープンキャンパスへの参加など生徒が積極的に進路選択を広げる環境づくりをおこなう。	
保健	I	自身の健康に関心を持ち、主体的に健康な生活を送ることができる心と体を育む。	個々に応じた保健指導や学年・他部署・専門職との連携を密にし、毎回同様の理由での来室や頻回来室、継続的な来室を減少させる。	B	保健室来室記録を活用し、同様の理由で来室する生徒や頻回来室者に対して原因と一緒に考える機会を設けた。基本的な生活習慣の振り返りと、早期の医療機関の受診を促した結果、継続した来室を減少させることができた。	症状や必要性に応じて、保護者や担任、キャンパスカウンセラーと連携を図り、多方面からアプローチをしていく。また今後も引き続き、健康課題の早期発見・早期治療の重要性について保健指導し、早期の医療機関の受診を促していく。	生徒の欠席時の家庭連絡の充実を求める声が保護者から出ている。
	I	学校安全に対する意識を高め、学校事故防止と緊急時対応の充実を図る。	年度初めの救急体制の周知徹底と、職員・生徒対象の救急講習会の実施、2ヶ月ごとに安全点検を行い、安全管理・安全教育につなげる。	A	年度初めの職員会議で「学校保健安全の手引き」の周知と健康上配慮が必要な生徒の情報共有を行い、救急体制の共通理解を図ることができた。また、職員・生徒を対象に心肺蘇生法・AED講習会を行い、一層の緊急時救急体制の充実を図ることができた。	今後も職員のみならず、生徒・保護者・PTAなどにも実践的な内容を組み込み、ブラッシュアップしていく。	保護者からは、子どもをこの学校に預けてよかった、という声もあるが、今後も生徒一人ひとりに寄り添った丁寧な指導を継続してほしい。
	I	学習面や対人関係などに困難を抱え、支援を必要としている生徒がよりよい学校生活を送ることができるよう、支援体制の充実を図る。	心のサポート委員会や特別支援教育推進委員会が情報共有・実態把握・対応の検討・実施・評価を行い、個々のニーズに合わせた支援を行う。	B	心のサポート委員会では、気になる生徒や支援を必要としている生徒について情報共有を行い、管理職、学年、キャンパスカウンセラーと実態把握や必要な支援について考えることができた。	必要に応じて、関係機関とも連携を図り、生徒のニーズに応じた専門的な支援方針を立てていく。	教員の仕事量は大変多い。地域や保護者が学校に何を求めれば、バンクする。
図書	I	図書委員を中心に、図書委員全員で図書室を主体的に運営する。	図書の出し入れや図書便り(BOOKMARK)の各学期1回の発行を図書委員が行う。	A	図書委員を中心に、図書委員全員で図書室を主体的に運営することができ、図書便りも学期に1回発行できた。	図書委員の活動が図書室の活性化につながるようにしたい。	先生方の日頃のご指導に感謝したい。ウェブサイト/フライング(部活動)を通じて家島のことを広めてくれている。
	I	図書室の利用を活性化させる。	図書室の利用生徒数を昨年度より増やし、年間貸出総冊数が100冊以上になるようにする。	C	全校生徒の数が減ったとはいえ、利用者3人、年間貸出数8冊と昨年の数字に比べて大きく減った。図書室の利用を活性化したい。	図書室で受験勉強をする生徒が増えれば、利用がルーティンワークとなる。そういった生徒が増えるようにしたい。	教職員も生徒も、家島を「(第2の)ふるさと」として活動してほしい。
	I	図書委員全員で書架の整理を行い、多目的に利用しやすい図書室にする。	書架の整理を完了させる。加えて読書以外にも活用できる環境を整える。(放課後のクラブ活動のミーティングなど)	A	書架の整理をし、自習、ミーティング、インターネットなど様々な目的で活用できた。また、授業で使用することもあった。	図書委員を中心に利用しやすい図書室を作り上げる。	
人権	I	生徒の人権尊重の意識を一層高める。	人権LHRを各学年で年間を通じて2回以上実施する。	A	学年主導であるが、各学年ごとで実情に応じたLHRを1～2回行うことができた。また、全学年対象の平和学習を実施できた。	年度の初めに、学年ごとの人権LHRの計画を学年と相談しながら立て、実施できているかの確認を学期ごとに行う。	
	I	生徒の秘密や人権に配慮した教育相談を着実に実施する。	学年は生徒と学期に1回以上面談し、学校全体ではキャンパスカウンセラーと連携した教育相談を月に1回以上行う。	A	面談とキャンパスカウンセラーとの教育相談を指標通り行うことが出来た。	継続して行っていく。	
	I	校内研修会を実施することで教職員の人権意識を高める。	校内で職員対象の研修会を1回以上実施する。	A	2学期に研修を兼ねた講演会を実施した。	次年度以降も引き続き新たな講演会等を検討する。	
1学年	I, III	挨拶・素直さ・仲間作りを大切に。自分の居場所があって安心できるクラス、皆で協力し、支え合って成長できるクラスをつくる。	挨拶を元気づけようとする。基本的な学校生活を確認する。クラスの中で、お互いに理解し合い、信頼できる友人をつくる。	B	挨拶を自発的に行えた。困っている友人を助けようとする場面が多くなった。またお互いに声を掛けあい、支えあう雰囲気が出てきた。	挨拶をより元気づけられるように声かけを行う。また生徒が主体的な学校生活を送れるよう、ロングホームルームや学校行事の活動を支援する。	
	I, III	部活動や学校行事への積極的な参加を促し、達成感や協調性を養う。	自分の興味のある部活動に参加する。各行事は各々が自分の役割を果たし、クラスへ貢献する。	B	例年に比べて部活動の加入率が低く、参加を促したが微増にとどまった。クラスでは各生徒が責任を持って委員など自分の役割を果たすことができた。	継続して部活動への入部を勧める。責任感を持ち、各委員の役割を果たすことができるよう声かけをする。	
	I, IV	将来を考え、具体的な目標を持ちそれに向けて努力する力を養成する。	キャリアノートを活用し自己理解を深める。進路学習を通して希望の進路実現のための努力をする。	B	キャリアノートを利用し、自己理解を深める活動ができた。進路学習により、各自の進路に対する考えは深まったが、希望進路の実現への具体的な行動につながらなかった。	継続してキャリアノートを利用し、自己理解を深める。希望する進路をさらに明確化し、その実現に向けた具体的な目標を立て、行動できるような支援をする。	
	II	学習習慣の確立を図り、基礎学力を身に付ける。主体的に学ぶ姿勢を養成する。	日々の授業を大切に、基礎基本の確立を目指す。集中して授業に取り組める環境をつくる。	B	欠席日数が多い。また提出物への取り組みに対し、声かけをするが、はっきりとした改善が見られない。授業には集中して取り組もうとしている。特に教え合い、意見の交換といった活動には主体的に、活発に取り組んでいる。	日々の授業態度や提出物の取り組みに対して声かけを行う。また、生徒同士で集中した授業、主体的な学びに繋がるような声かけができるように呼びかけ、支援をする。	
2学年	I, III	自己を律しながら計画的に行動し、他者の気持ちを推し量り協力的に問題を解決できるようにする。	提出物などのスケジュールを管理する。他者の立場からの視点を意識した言動を心がける。	B	提出物については、完璧な状態で期限を守って提出することができていない生徒もいる。居残り学習や、声かけなど提出のために多く時間を使った。	できていない生徒には、引き続き、声かけや指導を行う。	
	II	基礎的な学習習慣の確立し、基礎学力を身に付ける。また、主体的に学び物事を考える姿勢を身に付ける。	スタディサプリの課題配信を日常的に行い、学習習慣を身に付けさせる。	C	学習状況から、多くの生徒が家庭での学習習慣の定着が不十分であることが読み取れる。	引き続き、声かけや指導を行うと同時に、課題の精査を行う。	
	IV	卒業後の進路を見据え、目標と計画を明確にしておく。	自分が将来どのように社会参加していくのかを考えさせ、どのような進路を目指すべきかを具体的に考えさせる。	B	進路行事や進路学習を行ったが、進学、就職ともに進路の見通しが立てられていない生徒がいる。	進路学習や面談等を行いながら、進路決定への意識を高める。	
3学年	I, III	「凡事徹底」を目標に基本的な生活習慣を定着させ、クラスの一員としての役割を果たすとともに、自分が今すべきことと考えて行動できるようにする。	定期的な生徒自らが自己評価を行い、さらによりクラス形成ができるようにする。	A	月末に振り返りを実施し自己評価を行なったことで、自身の現在地を見失わず、今すべきことを考え、他者を慮った行動ができる生徒が増えた。	月末振り返りシートの活用法を改善する。	
	II	基礎学力向上に向けて学習意欲を喚起する。	教科担当と情報交換、情報共有を行い、成績不振科目保有者ゼロを目指す。	A	授業態度や課題等の提出状況が改善され、成績不振科目保有者数はゼロで終えることができた。	学年、教科担当者、生徒間の情報交換・情報共有にICTを積極活用する。	
	IV	全員が希望の進路先に到達できる。	進路指導部と連携しながら、計画的に進路実現に向けた行動をとらせる。	A	学習支援や面接試験等の支援を粘り強く行い、進学・就職を問わず全員が年内に希望進路に到達できた。	前年度までの卒業生のデータをさらに十分に活用する。	